

環境デザインに関する国際教育プログラムの構築について

INVESTIGATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION PROGRAMS IN THE FIELD OF ENVIRONMENTAL DESIGN

川北 健雄 デザイン学部環境・建築デザイン学科 教授
 岡村 光浩 基礎教育センター 准教授
 長濱 伸貴 デザイン学部環境・建築デザイン学科 准教授
 金野 千恵 日本工業大学生活環境デザイン学科 助教

Takeo KAWAKITA Department of Environmental Design, School of Design, Professor
 Mitsuhiro OKAMURA Center for Liberal Arts, Associate Professor
 Nobutaka NAGAHAMA Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor
 Chie KONNO Department of Living Environment Design, Nippon Institute of Technology, Assistant Professor

要旨

本研究では、環境デザインに関する新たな国際教育プログラムの構築をめざして海外の先行事例に関する情報を収集し、それらに関する分析考察を行う。なかでも短期集中型で実施されるワークショップ形式の国際教育プログラムに注目する。

本学ではこれまで2回にわたって、ユネスコの景観と環境デザインに関する講座、CUPEUM¹⁾が主催する国際ワークショップ、WAT²⁾に参加し、その実施運営についてのノウハウを蓄積すると共に、このような国際ワークショップの教育上の意義と可能性について検討してきた。

これらの経験を基礎として、2012年度はイタリアのサルデーニャ島で開催されたLandworks³⁾のワークショップに参加し、ランドスケープ分野の国際ワークショップという共通性は有しつつも、テーマ設定、組織、運営等において、WATとは異なる方式のワークショップについての情報収集と比較考察を行った。

また、フィンランドのヘルシンキで開催されたCumulus⁴⁾大会およびフランスのサンテティエンヌ⁵⁾で開催されたデザインビエンナーレへの参加を通して、環境デザインを取り巻く世界の動向を把握した。さらに、ランドスケープの教育機関として著名なフランスのENSP⁶⁾を訪問して情報交換を行い、今後の連携の可能性に関して検討を行った。

Summary

In this paper, the possibilities of international education programs in the field of environmental design are investigated. We particularly focus on the intensive international workshop programs.

So far Kobe Design University participated in two international workshops named WAT, organized by CUPEUM (Chaire UNESCO en paysage et environnement de l'université de Montréal). Through these experiences, we have reviewed the educational significances of the workshops as well as technical matters for administration.

In 2012, we participated in another workshop Landworks Sardinia in Italy. Through comparison, we further examined the possibilities of design topics, organization, and administration of the international workshops.

We also participated in the Cumulus conference in Helsinki in Finland and the Saint-Étienne Design Biennale in France in order to grasp the global situation of environmental design. On the visit to ENSP, a well-known school of landscape architecture in France, several possibilities for international cooperation in the future were also discussed.

1) 研究の背景と目的

環境デザインが対象とする都市、建築、ランドスケープの課題は、特定の地域や場所の特性と深く関わっている。一方、現代社会においては環境デザインに関わる諸問題のグローバル化が進展しており、ローカルな視点だけでは解決できないような世界共通の新たな課題が次々と生まれている。この分野で国際的な教育プログラム構築の必要性が増しているのには、以上のような背景がある。

その中で特に有効な教育プログラムの方式のひとつとして注目されるのが、短期集中開催型の国際ワークショップである。ランドスケープと環境デザインに関するユネスコ講座 CUPEUM が 2004 年より世界各地で継続的に開催している WAT は、その代表的な例であろう。WAT_Kobe 2009 では、本学は単なる参加校というだけでなく開催地のホスト校として運営面においても重要な役割を果たした。また、2011 年には WAT_Montréal に参加し、CUPEUM およびモントリオール大学との連携をより強いものとした。CUPEUM は、WAT を主催するだけでなく、そのネットワークに含まれる他の教育機関等が開催する国際行事の支援も行っている。2012 年にイタリアで開催され、本学も参加した Landworks Sardinia は、そのような国際ワークショップのひとつである。

本研究では、環境デザインに関する国際教育プログラムの具体的な実施手法としての、これらの国際ワークショップの特徴について考察する。また、他の国際的な行事への参加や関連教育機関へのヒアリングを通して、環境デザインに関する国際教育プログラムがめざすべき方向性を明らかにする。

2) Landworks Sardinia 2012

ワークショップの開催地であるサルデーニャ島は、地中海に浮かぶイタリアの島である。この島の約 1/6 には、ユネスコが支援する世界ジオパークネットワークに登録されたサルデーニャジオパーク（Geological and Mining Park of Sardinia）が広がっている。

Landworks Sardinia 2012 は、このジオパークの価値を再発見して新たな活用方法を見いだすことを意図した、

ランドスケープのワークショップである。サルデーニャ島南西部のモンテヴェッキオとイングルトスという 2 つの村を中心とする廃鉱跡の諸施設が多く残るエリアを対象地として、2012 年 5 月 21 日から 31 日までの 11 日間開催された。イタリア国内はもちろんのこと、カナダ、フランス、タイ、レバノン、日本など、世界各地から 60 人あまりの若者が集まり、6 人の専門家が指導するチームに分かれて、鉱山跡の諸施設や自然要素の価値の再発見につながるようなアート作品を現地で制作した。

本学大学院からも 2 人の学生が参加し、様々な国の若者と一緒にと寝泊まりして、連日集中的な作業を行った。その内容は、地形・鉱山施設跡・植生・土壌等の調査、各場所の特性の解説と潜在的な魅力の発見、それを具現化して表現するためのアイデアの提示とチーム内での議論、そしてそのような一連のプロセスの結果としてのインスタレーションの制作である。最終プレゼンテーションには本研究チームの川北もゲストクリティックのひとりとして招かれ、関係者と様々な意見交換を行った。

Landworks Sardinia を WAT のようなデザインワークショップと比較したときの大きな特徴のひとつは、現場の土地や建物に、実際に手を加える作業を行うことにある。国籍の違う学生を混合したチームごとに作業を行い、専門家が各チームを指導するというやり方は共通しているが、デザインワークショップの場合、図面が主な成果物となるのに対して、Landworks の主な成果物は現場で制作されるインスタレーションである。WAT を含む環境デザイン



写真 1) Landworks Sardinia 2012 鉱山施設跡のアート作品。

分野の多くのデザインワークショップでは、コンセプトに関する議論や図面制作等に多くの時間が当てられるのに対して、Landworks の場合には、議論よりも現場での施工作业により多くの時間が当てられ、実物がそのままプレゼンテーションされる。そのため、デザインワークショップでは、共通言語としての英語でのコミュニケーション能力が議論のために不可欠となるのに対し、Landworks では、たとえ英会話力が不十分でも、身振り手振りを交えつつ現場での共同作業に必要なコミュニケーションを行うことのできる場合が多い。成果物がアート作品である場合、言葉による説明がなくても、作品そのもので重要な事柄を表現できるということも、このような違いに影響していると考えられる。

それぞれのワークショップの特徴は、運営面においても大きな違いをもたらす。WATのようなデザインワークショップでは、現地調査後の図面制作等は部屋の中で行われ、プレゼンテーション図面がそのまま成果の記録となる。作業のために必要となるのは、筆記具、パソコン、グラフィック関係の共通ソフト、プリンタ、用紙等である。一方、Landworks ではミーティングルーム等で打ち合わせが行われることがあっても、成果物を制作するための主な作業は直接現場において行われ、成果物は写真等で記録される。作業のために必要となるのは、インスタレーション制作のための資材と様々な道具、運搬用の車両等である。なお、いずれの場合にも、運営面ではワークショップ期間中の宿泊施設や食事等の手配が重要であり、それらの質や利便性の違いが良い成果を生み出せるかどうか大きく影響することにも、十分留意する必要がある。

教育効果という点から考えると、これらのワークショップはいずれの場合にも、現地での調査や共同作業を通して、自国とは異なる環境の中で他文化に属する人々の考え方に対する理解を深め、国際的な視点に立脚しつつも地域独自の特性を生かした提案を行う能力を養うのに、大きく寄与すると考えられる。一方、ワークショップのテーマや作業内容の違いにより、そこで得られる技術的な知識や経験は、それぞれ異なったものとなる。

3) デザインを取り巻く世界の潮流

環境デザインに関する国際教育プログラムがめざすべき方向性を明確化するため、本研究ではワークショップへの参加と並行して、デザイン分野の国際会議や国際的なイベントに参加し、世界における環境デザインの動向と今日的課題に関する情報収集を行い、合わせて様々な人々との意見交換を行なった。

2012年5月のCumulusの大会は、フィンランドのヘルシンキで開催された。ちょうどヘルシンキでは、デザインを都市の社会的、経済的、文化的な発展に生かすことをめざすWorld Design Capital⁷⁾も開催中で、大会ではこれと連携した講演等も行われた。また、やはりCumulusとの連携で、ソーシャルイノベーションとサステナビリティをテーマとしたDESIS⁸⁾フォーラムが開催され、本研究チームからも川北が日本の西脇市における活動事例を紹介した。Cumulusの大会で実施された行事は多岐に渡るが、国際的な連携のもとデザインを社会変革のために戦略的に活用していこうとする認識が参加メンバーの多くに共有されていることを、様々な場で確認することができた。

2013年3月には、フランスのサンテティエンヌ市で開催されたデザインビエンナーレを視察し、市の関係者へのヒアリングを行った。この都市はかつて鉱業や武器製造産業等で栄えたが、現在それらは衰退し新たな都市戦略が必要となっている。市の中心部には、旧軍事施設を保存活用した建物等をキャンパスとするサンテティエンヌ・アート&デザイン大学およびCité du designと名付けられた大



写真2) サンテティエンヌ・アート&デザイン大学のキャンパス

きな展示場を含むデザイン活動のための複合施設がある。地域の産業振興を意図したデザインビエンナーレの開催、学校施設の改修機会をとらえたデザイナー参加型のデザイン教育の試みなど、都市の活性化のためにデザインの力を様々な局面で活用しようとする姿勢を随所に見ることができた。

以上のように、デザインを社会的な問題を解決するのに生かし、国際的な連携のもと、持続性のある都市や地域をつくりあげていくために積極的に活用しようとする取り組みが、今、世界各地で進められている。

4) 様々な機関との連携による今後の展開について

前章で示したような世界的潮流を受けとめ、グローバルな視点に立脚した新しい時代を創り上げるための環境デザインを実現するには、教育の場においても、世界共通の課題についての認識を高め、異文化に属する人々と連携してそれに取り組む方法を学ぶことのできる機会を設ける必要がある。そのためには海外の教育機関等との連携をさらに強化し、様々な共同作業を可能にするネットワークを幅広く構築していかなければならない。

CUPEUM およびモントリオール大学とは、今後のWATへの参加だけでなく、本学が主体的に取り組む国際教育プログラムの構築にあたっては協力を得ながら、いっそうの連携をはかる予定である。Landworksについては、2013年度も引き続きこれに参加して現場作業型のワークショップの意義と課題を検討し、運営面のノウハウについてもさらに具体的な情報を収集する。

また、本研究では2013年3月にフランスのENSPを訪問して様々な情報交換を行った。その結果、2013年9月に開催予定のノルマンディー地方を対象地としたEMiLA⁹⁾のワークショップに、ヨーロッパ外からの数校の参加が望まれていたことから、本学も招待を受けて大学院生2名と教員1名がこれに参加することとなった。

以上のような様々な国際ワークショップへの参加経験を基礎とし、また、これまでにつくりあげてきた海外の教育機関とのネットワークを生かして、今後は日本での国際ワークショップ開催も視野に入れつつ、国際教育プログラ

ムの構築に向けた取り組みをさらに推進していきたい。

註

1) Chaire UNESCO en paysage et environnement de l'université de Montréal.

2) Workshop_aterier/terrain. WAT_Kobe 2009については紀要『芸術工学2010』、WAT_Montréal 2011については紀要『芸術工学2012』に、報告が掲載されている。

3) イタリア Sassari 大学の MMLU (Master in Mediterranean Landscape Urbanism) が始めた、アートインスタレーションなど現場での実作業を行うことを特徴とするランドスケープの国際ワークショップ。2011年から毎年1回、サルデーニャ島で開催されている。2013年からは非営利団体である LANDWORKS (ワークショップと同じ名称) が設立されて運営主体となり、今後はヨーロッパ以外での開催も予定されている。

4) Cumulus (International Association of Universities and Colleges of Art, Design and Media)は、芸術とデザインの教育研究のための国際組織で、2013年7月現在、48カ国から198の大学等が加盟している。事務局はヘルシンキに置かれており、本学も2009年に加入した。

5) Saint-Étienne。人口約17万(2010年現在)のリヨンの南西約60kmにある都市。ユネスコの創造都市ネットワークにおいて、神戸と同様に「デザイン都市」のひとつとして認定されている。

6) École Nationale Supérieure de Paysage。1874年に創立されたヴェルサイユ園芸学校を前身とし、1976年に開設されたランドスケープ系の国立大学である。

7) World Design Capital は、ICSID (International Council of Societies of Industrial Design) が推進するイベントで、デザインを都市の社会的、文化的、経済的課題の改善に役立たせることをめざしている。2年に1度、世界中から1都市が選ばれて開催される。

8) Design for Social Innovation and Sustainability。世界のデザイン系教育機関における研究組織のネットワークで、社会の持続性のためのデザインを推進している。

9) European Master in Landscape Architecture。ヨーロッパの5つのランドスケープ系の教育機関 (Amsterdam Academy of Architecture, Department of Landscape Architecture / Universitat Politècnica de Catalunya, Escola Tècnica Superior d'Arquitectura de Barcelona / The University of Edinburgh, Edinburgh School of Architecture and Landscape Architecture / Leibniz Universität Hannover, Fakultät für Architektur und Landschaft / École Nationale Supérieure du Paysage Versailles/Marseille) が共通で実施する修士レベルの教育プログラムで、デザインスタジオが重視される。2009年から毎年、異なった場所でサマースクール(ワークショップ)を開催している。